

一 八世紀前半の俗信と不作の忌避

― 神譴としての「天氣不正」と差し留められる湯治 ―

浪川 健治

はじめに

近世においては、凶作を予感させる天候不順が起こると、まず採られたのは宗教的権威によるその忌避あるいは豊饒への祈念である。^① 弘前藩での寺社への祈祷は、四社五山とされた広瀬・龍田・加茂・貴船の神社、最勝院、百沢寺^②（廃寺）、国上寺、橋雲寺、久渡寺の寺院を中心に行われた。

弘前藩領では、一七世紀末に元禄八年（一六九五）に深刻な飢饉に襲われたのに比べて、一八世紀前半にはその末、寛延二年（一七四九）から三年にかけて多くの餓死者を出したほかは、不作ではあっても大きな飢饉は記録されていない。しかし、この時期には、豊作―「米下直」が引き起こすあらたな「難儀」が意識化されてくる。とくに、元文期（一七三六―四一）以降、「ききんと申二も無御座」き状況でも、困窮して「御救米」を必要とする者が続出した。このため、凶作を予感させる天候不順が起こると、こうした「難儀」のなかで、藩はそれまでの寺社への祈祷だけでなく、豊穰を約束するあらたな宗教的・呪術的な権威を創

出する。それは一八世紀後半の護穀神の勧請（寛延三年（一七五〇））、^③ 「御緒太」の領内巡行にみられる豊作祈祷・祈念の体制となつて現れた。

その一方で、神域でもある自然への侵入、換言すれば人間による自然秩序の意図的な改変やそこでの不浄とされる行為は神威への冒瀆であり、その結果、神譴としての「天氣不正」^④ が起こるといふ觀念^⑤ 俗信はなお生き続いていた。それは、とくに山体そのものが神体であり、領内の豊饒を約束する存在として意識され信仰の対象ともなっていた岩木山に顕著であつた。そこへの「不浄者」の入り込みが天候不順を引き起こすことがひろく信じられていた。実際は、現実には天候不順が起こり不作の徴候が感じ取られて初めて、神域への「不浄者」の入り込みや冒瀆する行為があつたことによる神譴に違いないという、先入的で固定的な觀念が共有されていたのである。

注意すべきは、一八世紀前半ではそのような神威を示すと考えられていたものは必ずしも岩木山に限られてはいることである。^⑥ たとえば、「国日記」^⑦ 享保一六年（一七三一）七月五日条の飯館組代官申立てでは、原子村幸右衛門が大滝沢・落沢銀山を見立て「自分物入」での「普請」

を申し出た。詮儀の結果、「普請」の対象地の倉山は松倉山ともいい、本尊（松倉観音堂）が「岩穴」に安置されており、「金穿」がその霊域へ立ち入ることが問題となった。

神域あるいは霊域に立ち入れば天候不順となるのは、「不浄穢之者」のみではなかった。この場合では、「金穿」が「不浄穢之者」であったのではなく、大勢が入山し本尊が安置された山々を穿ち、自然の秩序を破壊する行為が「御山も荒、天気も悪敷罷成」る結果を引き起こすとされている。そうした素地の上に、岩木山（岩木山大権現）が「津軽之地主」「当国之鎮守」としての地位を確立していく過程で、神域にある高と湯段の二つの温泉への「不浄者」の入湯こそが「天気不正」という神譚を蒙る原因となり不作が招来されるという論理が作り上げられていく。

一 差し留められる入湯 ― 高温泉と「不浄之者」 ―

（一）「御不和合」― 争う神々 ―

岩木山（岩木山大権現）だけが津軽の地を守護する神であり、豊饒をもたらし、あるいは時として天候不順をもたらす神威を示すと考えられていた訳ではない。むしろ、岩木山と対立し争った神もまた存在する。「国日記」延享元年（一七四四）五月一日五条の「和徳・堀越組村々庄屋共申立」では、小栗山十二社権現八幡を嵩へ「奉守」しての「雨請」が許されている。具体的には、小栗山十二社権現の神主と庄屋二人・五人組三人・人夫三〇人が嵩に詣でて七日の間祝詞を捧げる。その後、戻って神楽を差し上げるといふものである。それでは、なぜ「雨請」の

ために、小栗山十二社権現を嵩へ岩木山へと「奉守」したのであろうか。「津軽俗説選」¹⁰では「津軽歴代録」を引いて、「権現平雨」と題した次のような話を載せている。文中の「」内は、原文では二行分かち書き。

津軽歴代録二曰、往古有二神、互二争為津軽之地主、此神軍高山崩レ、海水溢ル「俗海津波・山津波と云ふ」、山谷変海、河沼化丘「東浜于此時為人海と云ふ」、勝利神ハ現岩木山、敗軍神ハ隠小栗山「曰今権現平」、故小栗山ノ邑人崑木ニ不能登、亦郡中降雨多クハ自小栗山方降り始ム、下略

かつて、「津軽之地主」＝津軽の守護神の座をめぐる争いが争った。このために、山は崩れ海は大荒れになり、地形も大きく変わった。この結果、勝利した神は岩木山を住み所と定め、敗れた神は小栗山に隠れたという。この後、小栗山の村人が岩木山に登ることが叶わなくなった。また、津軽郡の雨は多くの場合、小栗山から降り始めるという。「権現平雨」の俗説によつて、敢えて岩木山大権現とは不和の小栗山十二社権現を嵩まで「奉守」して降雨を願ったものか。この戦う神々の伝承が、少なくとも一八世紀後半でも息づいていたことは、「国日記」明和四年（一七六七）七月六日条の「勘定奉行申立」によつて明らかになる。

一、勘定奉行申立候、先達而小栗山村十二所権現ニ而五穀成就祈禱仕度候付、辻札之儀社司申出候処、辻札之儀は願之通被仰付候、然処同社之儀は往古より鎮守岩木山と御不和合之由、尔今申伝候、然此度百沢寺登山之上御祈禱被仰付候間、右十二所権現社司祈禱之儀、今日中ニ御差留被仰付候様奉伺旨申出之、達作兵衛江、差留候ニ不及旨、書付ニ而勘定奉行江遣之、

百沢寺で五穀成就の祈禱を執行するので、十二所での五穀成就の祈禱は今日中に差し留めることが上申されている。ただし、この件は家老棟方作兵衛によって却下された。百沢寺の五穀成就の祈禱とは、「国日記」明和四年七月一日条の「郡奉行・勘定奉行申立」で、小栗山十二社権現を敢えて嵩（百沢寺・岩木山）まで「奉守」して雨乞の祈禱を執行しようとしたことに相当する。注意すべきは、まず小栗山村十二所権現と「鎮守」である岩木山とは「御不和合」であることを、勘定奉行も「尔今申伝」られることとして認識していたことである。また、「鎮守」（津軽という地の）である岩木山での祈禱執行が十二所権現でのそれより優先されるものとされていたことが窺い知られる。それには、「津軽之地主」となったもつとも崇敬される神としての岩木山の神威の成立―藩によるそのことの受容が関わっているように。

（二）繰り返される湯治の差し留め

「不浄者」の山への立ち入りなど、自然秩序を冒そうとする人間の作為が神譴を生み、天候不順を引き起こし不作の原因となる。そのような怖れは、「風説」・「風聞」・「下々」の申し唱えとして現れる。「国日記」明和四年七月六日条の「勘定奉行申立」にみるように、藩にとって豊饒をもたらし、あるいは時として天候不順をもたらす神として何より優先されたのは岩木山であり、領内で天候不順が報告されれば、多くの場合、岩木山への「不浄者」の入り込みがあったものとして対応が図られた。「風説」の流布による怖れの高まり、すなわち社会不安の解消のために、「不浄者」による作為を停止させることを繰り返した。その顕著なあら

われが、岩木山麓にある嵩と湯段の二つの温泉への諸人の湯治の差し留めであった。ただし、二つの温泉での湯治自体が「不浄」として取り締まられたのでない。対象は、湯治人のなかに入り込んだ「不浄者」の存在と行為、殺生あるいは生臭物という「不浄」なものを持ち込む人間ということになるう。

弘前藩領の湯治の場合は、ほかに酢ヶ湯・大鰐・蔵館・温湯・浅虫・沖浦・板留・切明・金目・碓ヶ関・田代などである。温泉のうち、酢ヶ湯への入湯については入湯者数が記録される年もあるが、嵩や湯段をはじめ、他の温泉の記録は断片的にしか残されていない。このうち天候不順を引き起こす「不浄穢之者」の者の入り込みによって湯治が停止されたのは、嵩と湯段である¹³。

ここで言う「不浄之者」あるいは「不浄」とは何であったのか。長谷川成一「天気不正」風説と白神山地¹⁴では、弘前藩の公式記録のなかで「天気不正」の風説に関するはじめの記事は、「国日記」寛文四年（一六六四）閏五月一四日条であるとする。

一、打続雨ふり、在々肝煎共御郡奉行衆へ申候ハ、か様二候ハ、稲二虫付キ可申候間、雨祭被仰付度由、又嵩の硫黄の平へ湯入之者共など参、鳥など持参候故二も候哉と、御勘定奉行衆も申達二付而、伊勢二て神楽申付候、又百沢寺へ湯本にて湯入之者共も申付様委細書状、浅利猪左衛門・関伝右衛門方より越せ候、

浅利と関は、小知行頭である。「在々肝煎共」が長雨で虫害となることを恐れて、止雨を願う「雨祭」の執行を郡奉行へ要請した。藩は、長雨の原因は嵩の「硫黄の平」¹⁴の入湯者が鳥などを持ち込んだからではな

いかと推量している。問題となるのは、長雨の原因を嵩への鳥―不淨物の持ち込みにあるのではと推測したのは「御勘定奉行衆」であって、「雨祭」の執行を願い出た「在々肝煎共」ではないことである。さらに、「湯入之者共も申付様」とされているだけで明確に入湯が停止された訳でもない。この時点では、在方の長雨による虫害への畏怖は、「不淨之者」が「諸鳥・玉子」・「諸鳥之類」（突き詰めれば、肉食と殺生）を持ち込み、神域を穢し天候不順を引き起こすという観念とも、また即座の入湯停止とも結びついてはいないことになる¹⁵⁾。

元禄飢饉後の「国日記」元禄九年（一八九六）八月五日条では、嵩への入湯は最近では八月一五日まで停止されていることを記している。

一、岩木嵩江湯治之者、近年八月十五日迄停止ニ申付候処、当年は御郡中田地植付も遅、其上今程時々悪風吹稻実兼候間、当月廿日此迄入湯之者御停止ニ可被仰付哉之由、郡奉行相伺頼負江達、今廿日迄入湯之者参候儀停止に可申付由申渡之、

ここでは、「当年は御郡中田地植付も遅、其上今程時々悪風吹稻実兼候」という不作に結びつく農事の遅れや天候不順が意識されると、ただちに郡奉行は嵩への入湯停止を上申している。後述する「国日記」寛延二年（一七四九）七月二四日条の「百沢寺申立」では、「元禄年中」から「度々」に天候不順を理由とする入湯停止や停止期間の延長が「度々」の「御法度」として発令されたとしている。そうした場合、元禄八年の天候不順―飢饉による甚大な被害の記憶こそが、藩が領民のなかに天候不順↓凶作という危惧の高まりを感じ取ると、ただちに「御法度」⇨入湯停止が繰り返し発令するようになった契機と推測される。

二 入湯停止のメカニズム

―「天気不正」の危惧から湯治が差し留められるまで―

（一）湯治停止の提起―郡奉行の「沙汰」―

嵩は、度々「天気不正」⇨天候不順によって入湯が禁ぜられた。「国日記」享保一六年（一七三一）九月一七日条の「覚」では、次のように領内に徹底された。ここでは、嵩のみが対象である。

覚

一、^{（第1条）}天気相不宜候付、岩木嵩湯治停止被仰付候、尤追而被成御免候迄堅参間敷旨、右之通当番通用被仰付候、

一、^{（第2条）}此度天気相不宜候ニ付岩木嵩湯入停止被仰付候、追而被成御免候迄堅参間敷旨、在々江可被申付候、尤在々取仕廻も致、入湯有之候而も不苦時分、各より可被申達候、其節湯入可被成御免候、勿論自今以後例年春・秋嵩湯停止之儀并御免之節共、各より相伺候様被仰付旨、郡奉行江申遣之、

一、^{（第3条）}天気相不宜候ニ付、岩木嵩湯入停止ニ被仰付候、尤追而被成御免候迄、堅参間敷旨被仰付候、此段支配江可被相触之旨、弘前町奉行・九浦町奉行江廻状申遣之、¹⁶⁾

第1条では、「天気相不宜」のために嵩での湯治が「停止」され、その旨目付から触るように申し付けられている。第2条では、とくに在方へ湯治「停止」を徹底させ、「停止」・再開とも郡奉行から伺いを立てることとしている。第3条では、「湯入」が再開されるまで堅く守ること、

この旨を町方・九浦町方に廻状で申し付けるとしている。

「国日記」元文二年（一七三七）四月二十九日条の「菊池十蔵申出」では、どのような状況判断によって嵩での「入湯」の停止の是非が協議されたのかをより詳細に知ることができる。

（第1巻）
一、菊池十蔵申出候、当春より天氣相荒統、寒申候二付、ケ様年引
当も有之、耕作方之程無御心元被思召二付、相考可申上旨被仰付、
左二申上候、

（第2巻）
一、年々三・四月之頃、暖氣成年ハ五・六月之頃より寒申候故、作
も不熟仕候、くれかき仕候内、荒申候而も耕作差支申訳無御座候、
五月廿日頃より八月十日頃まで之内、天氣能御座候得ハ作合成就
仕候、只今迄申候分不苦儀ニ奉存候、

（第3巻）
一、当年只今迄寒申候得共、苗生出候様子詮儀仕候所、諸組共苗痛
候所も無之生出能御座候、此末天氣統暖氣罷成候ハ、秋作も不作
仕間敷と奉存候、

（第4巻）
一、只今迄荒統申候得共、右申上候通、植付前ハ耕作指支申儀も無
御座候二付、嵩入湯之者御停止之儀不申上候、

右之趣、同役共沙汰仕申上候旨申出候に付伊織江達之、

菊池は郡奉行であり、第1条の「耕作方之程無御心元」という不作に
対する漠然たる不安に対して、現状と今後の見込みを第2条・第3条で
示し、第4条で嵩での湯治の扱いに言及している。第2条では、毎年
三・四月、温暖な年は五・六月は寒く、生育が進まないもので、塊搔最
中に天候が不順でも耕作には支障がない。五月二〇日から八月一〇日頃
迄に天氣に恵まれれば不作することはない。第3条は、今年は寒冷では

あるが、苗の発育が劣っている所もなく、今後の天気次第で不作するこ
とはないとしている。そして、第4条で天候は不順だが、田植前でもあ
り耕作の支障とはならず、嵩の入湯を停止するまでないと上申してい
る。

上申は、「耕作方之程無御心元被思召二付」いてのことだとしている。
このとき、六代藩主津軽信著は参勤していることから、「被思召」た主
体は家老の可能性が大きい。したがって、郡奉行である菊池十蔵から用
番家老隈部伊織への上申の形を取っており、結果として入湯は停止され
なかったが、実際の稲作の進行と経験から郡奉行が実質的に可否の判断
をしていることが読み取れよう。

当然ながら、この過程に「不浄之者」の存在や行為が先だつてあつた
のではない。藩主や家老と言つた為政者が天候不順を危惧した時に、郡
奉行に農耕の状況を調べさせ、嵩での入湯の可否を上申させる。「国日
記」享保一九年（一七三四）七月二十七日条の「工藤嘉左衛門申立」でも、
岩木嵩での湯治は例年七月二〇日頃の天候によって判断し、その後湯
治を許可するとしている。もちろん、前述の「国日記」元禄九年（一六
九六）八月五日条のように、為政者が状況を把握する以前に、天候不順
による著しい農耕過程での遅滞などの支障がすでに顕在化していたなら
ば、郡奉行は湯治の差し止めをただちに上申することになる。

（二）湯段温泉の組み込み

同様な天候不順の際の入湯が停止された湯治場として湯段がある。
「国日記」安永五年（一七七六）八月二十四日条の「枯木平村領湯段小屋

主長兵衛申立」は支配換えの願いである。

一、枯木平村領湯段小屋主長兵衛申立候、同所湯之儀、享保九年私見立仕、願之上居村同様普請仕、式拾ヶ年已前まで御代官様御取扱御座候処、其後岩木嵩湯坪同様御勤番様御封印ニ而難儀仕候之間、古来之通御代官様御取扱二被仰付被下置度奉願旨申出之、古来之通難申付旨申遣之、

「申立」によれば、湯段は享保九年（一七二四）に長兵衛が見立て湯治場として普請した。「式拾ヶ年已前まで」、すなわち宝暦六年（一七五六）頃までは「御代官様御取扱」であったが、その後、嵩同様に勤番が置かれ藩によって「御封印」されるようになったとしている^⑦。これは、嵩同様に同湯での湯治が藩によって直接に管理されるようになったことを意味する。

とはいえ、すでに「国日記」享保二〇年（一七三五）九月一日条では、嵩への湯治に加えて湯段も「当分停止」となったことを記している。

一、先達而岩木嵩江湯治之者、当分停止申付候所、其以後大勢湯治人有之候様相聞江候、御免も無之内如何相心得湯治人差置候哉、不届成事、同所并湯段共、湯治人早々押上候様、猶以停止之趣急度可被申付旨、寺社奉行・郡奉行江申遣之、尤右之趣夫々可申通之旨、当町奉行江申遣之、九浦町奉行江ハ廻状ニ而申遣之、御家中之面々江は当番通用ニ可申付之旨、大目付江申付之、

突然の入湯の停止の発令は、湯治場での混乱を引き起こした。多くの湯治人がおりその追い払いが命じられている。その際、この旨は寺社奉行・郡奉行・町奉行に直接申し付けられ、九浦町奉行には廻状で、家中

には「当番通用」（目付からの触）によって領内全体に徹底させている。このことは、家中・寺社方・在方・町方を問わず、藩による停止令を守らない小屋主や湯治を続ける入湯者が少なからずあったことの証左であろう。

これ以前に、いつ湯段が嵩とならんで湯治停止の対象地となったのか、またその経緯については現在の所では明らかにし得ない。前述の「国日記」享保一九年七月二七条の「工藤嘉左衛門申立」では湯治停止とするか否かの対象は岩木嵩だけであったが、「国日記」享保二〇年九月一日条では湯段も対象とされている。「国日記」安永五年（一七七六）八月二四日条の「枯木平村領湯段小屋主長兵衛申立」によれば、湯段は享保二〇年段階では「御代官様御取扱」、すなわち村方支配であったにも関わらず、百沢寺―寺社支配であった嵩ともどもに「不浄者」の入湯が天候不順を引き起こす湯治場とされている。こうした流れからみれば、湯段も嵩とならぶ岩木山麓の湯治の場として入湯差し留めの対象として指定されたことで、やがて代官支配を離れ藩の直接的な支配のなかに組み入れられたことになろう。

藩が岩木山参詣と嵩の入湯を差し留めたのは、「諸鳥・玉子共」などを持ち込む「不浄之者」が神域を冒すことで天候不順となり農耕に支障が出ることを避けるためであった。しかし、それが不合理なものであることは、次に触れる寛延二年（一七四九）の「百沢寺申立」による指摘でも明らかであり、藩もまたそれを認めざるを得なかった。

それでも、なお岩木山参詣と嵩の入湯の差し留めという措置が取られ続けたのは、「国日記」元禄九年（一六九六）八月五日条に端的に示さ

れる「当年は御郡中田地植付も遅、其上今程時々悪風吹稻実兼」ねるといった農耕の遅滞と天候不順が危惧されると、そこに「国日記」享保三年（一七二八）八月六日条の「青森町瀧屋宇兵衛申立」の「天気悪敷諸人之唱在之」という「風説」・「風聞」・「下々」の申し唱え、すなわち凶作↓飢饉に対する恐れ―社会不安が生まれるからである。

三 杣入・湯治の差し留めが生む緊張関係

（一）錯綜する思惑

山への立ち入りなど、自然秩序を冒そうとする人間の作為が天候不順を引き起こし不作の原因となる。そのような怖れは、「風説」・「風聞」・「下々」の申し唱えなどとなつてあらわれる。藩はその高まり、すなわち社会不安の解消のために、そうした行為の差し留めを繰り返した。そのことで、鉾山の掘削や山林伐採などの経済活動が停止されるが、それを見立て「自分物入」での「普請」、あるいは「杣入」などを図った者にとつては大きな損失となる。このため、時にそれらの者たちは藩に代替措置＝補償を求めていくこととなった。

「国日記」享保一三年（一七二八）八月六日条の「青森町瀧屋宇兵衛申立」は、「耕田御山」が「御触山」となつたので杣入りを願ひ出て許されたが、その後、藩は「天気悪敷諸人之唱在之」として杣入りを停止させたことに端を発した一件である。要旨は次の通りである。

a すでに七〇人余の杣子を雇つており、「迷惑」＝不利益を蒙った。
b 杣入りは、結局許可されたが、杣子は逃るか辞めてしまい、多大の給

金が無駄になった。仕入資金のめども立たず、残つた杣子二四〇五人で稼業している。c 「私儀」は近年、「商売方不廻」なので「耕田山之働」で「今度身上相続仕」ろうとした。¹⁸ d 万が一、杣入許可年内に「風説」で、再び停止となれば「金元」（金主）ともに「身上潰」れる。e 諸人が「御大切之耕作障」と言い募れば杣入り停止は避けられず、「初山」ということもあり、大きな損分が出て不利益を蒙る。f 「耕作実法之時節」の天候不順＝不作の恐れという世上の「唱」は無碍にはできない。

なので、杣入り対象を「耕田御山」から「久栗坂御山」へ替えて欲しい。結局、瀧屋宇兵衛の杣入山は「久栗坂御山」に変更されている。なお、瀧屋は稼業するにあつた条件を提示しているが、本稿とは関わらないので省略する。瀧屋は、「耕田御山」への杣入は「耕作実法之時節」に「天気悪敷諸人之唱在之」という理由で停止された結果、破産に瀕するという実情を訴える。代替として藩に要求した「久栗坂御山」については、世上の「唱」から同様に杣入りが停止されるのではないか、という恐れはまったく考慮されていない。当時の人間にとつて、「久栗坂御山」はそのような神威を発現する場ではなかったのである。このことから、自然秩序の侵害（この場合は杣入）があつても、すべての「御山」で天候不順が起こるのではなく特定の神域でのみ起こると考えられていたことがわかる。

嵩での入湯の差し留めは入湯者だけでなく、管理した百沢寺や湯小屋の小屋主にとつても生活に直結した問題であつた。「国日記」元禄一〇年（一六九七）九月一〇日条の寺社奉行の「申立」は、百沢寺からの口上書を取り次いだものである（史料中のa～eは、筆者による）。

一、百沢寺口上書ニ而寺社奉行武田藤右衛門を以申立候は、昨日被仰聞候頃日天氣相不宜候ニ付、岩木嵩江湯入御停止ニ被仰付候由被仰遣候故、則湯本江申付候処、**a**大病ニ而入湯之者も御座候而、殊之外迷惑仕候、**b**其上小屋主共当年之儀ニ御座候得は、少々借錢仕漸々小屋等も繕仕候而、頃日少々入湯之者も御座候之処、**c**只今御停止ニ被仰付候得而は、右之通湯入之者、其上小屋主・湯ひちり共ニ迷惑仕候由申出候、**d**先達而御停止ニ被仰付候節も此段願申上度由申出候得共、其節被仰渡候は当月朔日より湯入御宥免ニ被仰付候由被仰渡候故願不申立候、**e**右申上候之通湯ひちり并小屋主共御停止ニ被仰付候而ハ及渴命難儀申候間、此段奉願旨申立之、

この口上書は、昨日、急に嵩の入湯差し留めが言い渡されたことに端を発する。百沢寺の主張は、**a**大病のため入湯している者もあり困り切っている。**b**今年、小屋主は借財して小屋を整備し、入湯者を迎えている。**c**入湯停止になれば、大病の者だけでなく、小屋主・「湯ひちり」(湯聖)までも困惑する。**d**「先達而」入湯停止が命ぜられた時には、九月一日から入湯が許されるとのことだったので、このような申し入れはしなかった。**e**以上の通り、「湯ひちり并小屋主共」、入湯停止となれば渴命に及ぶことになるので願ひ出る。

このように、嵩の湯は百沢寺の支配のもとにあり、小屋主は役銭を百沢寺に上納していたことが知られている。¹⁹⁾「湯ひちり」(湯聖)は、中世では高野山金剛峯寺で湯屋の雑役に従事した下級の僧であるが、真言宗智積院に属した百沢寺でもそうした雑役によって収入を得ていた下級の

僧が存在していたのであろう。**d**の「先達而」という表現は、過去一般ではなく、この一件直前に出された湯治の停止命令ということであろう。この「口上書」からは湯治の突然の停止は、入湯者だけでなく、小屋主・「湯ひちり」にも影響があり、結局、役銭を徴収している百沢寺がその要求を代弁するという構造が垣間見られる。

入湯者と小屋主の間にも緊張が生まれたことも、「国日記」元文四年(一七三九)八月一二日条の「百沢寺申立」から知られる。八月一〇日頃、嵩での湯治が差し留められた。八月九日に小屋主が入湯者を退去させるため嵩の湯元に赴いた所、差し止めを知らなかった金木新田と日本海添いの赤石村周辺からの入湯者が八日から八・九軒の湯小屋に逗留していた。小屋主たちは湯治差し留め、湯治客の引き払いという藩の指令を執行しようとしたが、入湯者たちは遠方から二日ばかりで来た上、立ち居もままならない「病人勝」と抗弁し説得に応じなかった。仕方なく留め置き、ほかの「町・在」の者もそのままとなっていたという。小屋主たちは、藩と湯治人との間で板挟みに陥っているが、このような事態は入湯停止令が突然に布告されることから、湯治場では度々繰り返されていたと思われる。

(二) 軋轢と抵抗——百沢寺の訴えから——

一八世紀前半にあつて、以上の湯治の停止をめぐる藩と百沢寺・小屋主・湯治人を廻る緊張関係について記しているのが、さき一部触れた「国日記」寛延二年(一七四九)七月二四日条の「百沢寺申立」である。

^(第1巻)一、百沢寺申立候は、岩木山参詣并湯治之儀、古来御停止無御座候

処、元禄年中より御法度之儀度々被仰付候ニ付、左申上候、

(第2巻)

一、同山参詣御指留之儀不宜奉存候、子細は祈願品々可有御座、中ニも別而御領内五穀成就之願は下々迄不致者無御座候、左様之儀御指留被為遊候事、失神威申儀と奉存候、百性は種蒔苗代を田之神と申而、耕作第一之祈願ニ参候故、作等成就仕候得は、是非参詣仕、兼耕作之障り可罷成筋無御座候、

上々様ニは大勢参詣之内ニは、定而不淨之者も参候ニ付、自然と天氣荒、耕作之障相成候様被思召候段至極仕候得共、不淨之者、決而登山仕候儀不罷成候、然は首尾好登山仕候者是不淨穢無之、天氣之障可罷成筋無御座候、度々御停止被仰付、御山不繁昌ニ罷成候ハ、結句、上々様之御為罷成間鋪と奉存候間、御法度之儀無御座様奉願候、

湯治之儀、古来は六月朔日より七月廿日迄御停止ニ而、秋・春御停止之儀無御座候、元禄年中より御法度之度々被仰付候、

(第2巻)

一、嵩湯之儀は、三山之内、鳥海山薬師峯より湧出、衆病患除之誓之名湯御座候、湯治人御座候ハ、天氣荒申候而、田畑之障成申儀御座候ハ、衆人救誓之為不罷成、無益之方便と申物御座候、同所は諸鳥・玉子共決而御法度之場所御座候、近年若左様之品持参申候者有之、天氣之障罷成候儀思召候ハ、已後諸鳥之類堅く湯元江持参不仕候様、急度被仰付、已後相定之御停止之外、四月・五月・八月・九月、右四ヶ月之内御停止無御座候様奉願旨申出、達作左衛門江岩木山参詣之儀并入湯之儀共、段々申立之通、尤至極之事候、併天氣相寄、例年沙汰之上登山入湯共差留候儀、早速

御沙汰難被及候、只今迄之通能々相心得候様可被申達之旨、寺社奉行江申付之、

一、岩木山参詣之儀、例年来月朔日より登山致候得共、作毛差障候ニ付岩木嵩湯治共、来月十日迄停止申付候、此段当番通用、前々之通可被申触候旨、大目付江申付之、

第1条での百沢寺の主張では、岩木山への参詣と湯治は、「元禄年中」から「度々」に「御法度」が申し付けられるようになったという。「御法度」とは、参詣と湯治の停止に他ならない。この「百沢寺申立」では、岩木山への参詣と湯治は本来は停止されるものではなかったのである。このことについては、元禄八年（一六九五）の飢饉の際に「嵩之湯」に弘前や在々から多くの湯治客があり、硫黄山へ入り込んだため「頃日度々雨降、在々稲二虫付候由沙汰承」る事態となり、「岩木湯硫黄山江一切人通間敷旨、百沢寺江可申付旨」が寺社奉行に申し渡されたこと（「国日記」元禄八年五月二二日条）との関連が指摘されている。⁽²¹⁾

第2条では、藩による岩木山参詣の差し留めを批判する。岩木山は「御領内五穀成就之願は下々迄不致者無御座」き存在であり、参詣の差し留めはむしろ「神威」を失わせる行為である。「上々様」は、大勢の参詣者のなかには「不淨者」もあり、天候不順となるとして差し留められた。ならば、「首尾好」く（好天に恵まれて安全に、という意か）に登山・参詣を行い得ていたなら、湯治者には「不淨穢」の者はいないことになる。

現実には、すでに天氣不順となっており、このままでは不作になるのではと言う怖れⅡ風説が生まれ、それを受けて差し留められる。その段

階で「不淨穢」の存在を問題としても意味がないことを指摘したものである。むしろ、度々の停止令は登山・参詣者を遠ざけて「御山」の衰退の基となり、かえって「上々様」の御為にならない。なので、「御法度」＝登山・参詣停止しないように願っている。また、「古来」から六月一日から七月二〇日までは湯治は停止されたが、秋と春には停止にはならなかった。しかし、「元禄年中」からは度々入湯停止が命ぜられたとされている。

第3条の前半では、岩木山の三つの峰のうち鳥海山の薬師峯から湧き出る「衆病患除之誓之名湯」である嵩温泉について述べる。入湯者があれば天候不順となり、耕作に支障を生じるというなら、「衆人救誓之為」にはならず、「名湯」との謂われは「無益之方便」である。嵩は「諸鳥・玉子共」持ち込み禁止であるが、近年、それを守らない者があり、それが「天氣之障」となるならば、今後は「諸鳥之類」の持ち込みを固く禁じる。なので、六月一日から七月二〇日までの「相定之御停止」以外、四月・五月・八月・九月の四ヶ月には入湯停止としないようお願いした。ここでも、「諸鳥・玉子」・「諸鳥之類」（殺生と肉食）が「天氣之障」りに結びついている。したがって、湯治にあつての「不淨之者」とは、何より殺生や肉食を行う者ということになる。

後半では、前半部の願いは家老棟方作左衛門に達せられ、もつともであると考えながらも「早速御沙汰難被及」、直ちに返答できないので今まで通りとされている。続く大目付への申し付けでは例年は八月一日からの登山・参詣であるが耕作に支障があるとして、この時には八月一〇日まで停止が命ぜられている。「百沢寺申立」の岩木山登山・参詣と嵩

の入湯停止は不合理という主張を、藩は「岩木山参詣之儀并入湯之儀共、段々申立之通、尤至極之事候」と認めながらも受け入れなかった。なぜならば、この時点で「風説」に合致するように、「天氣之障」が現実化していたからである。²³藩は「国日記」寛延二年七月一六日条の「米方・郡奉行・町奉行・勘定奉行申出」をはじめとして飢饉への対策を示しているが、「百沢寺申立」はまさにその時に提出されたものであった。

湯治については「古来」は六月一日から七月二〇日まで入湯が停止され、秋・春に「御停止」となることはなかった。しかし、「元禄年中より御法度之度々被仰付」ることとなったと言う。とするなら、「上々様」とは時の七代藩主信寧の父六代藩主信著あるいは祖父五代藩主信寿ではなく、元禄期の四代藩主信政をさしている可能性もある。「元禄年中」から「度々」に「御法度」が申し付けられたのは、前述の元禄八年（一六九五）の記述と照合すると思われる。同年五月段階で、その時点での多雨・虫害などの事象は、湯治客の硫黄山への入り込みが原因とされていた。同年は大飢饉となったために、以降、こうした天候不順が続くと、岩木山参詣と湯治に藩がそれを停止させることが慣例化していったものと考えられる。

まとめにかえて―「丹後者」新たな排除の論理―

「国日記」明和四年（一七六七）七月六日条の「勘定奉行申立」は、伝承のなかでの岩木山と小栗山村十二所権現との「国」を争った確執がこの時点でもなお意識されていたことを背景としている。ただし、岩木

山―百沢寺の祈禱が優先されるべきものとして認識されていたことも事実である。それは、「権現平雨」に付された評言によって知ることができさる。

此の説虚談なるべし、小栗山権現平の方より雨多く降り始め、此の邑の人民、岩木山の登山ならざる事、何も謂といふ事を知らねども、正直第一之神達、慾に迷ひて国を争ふべきや、又人間を加護あるべき神達、山海を動乱させて、土民に難儀をかけべきや、忝なくも岩木山大権現などは左様の無法の神にはあらず。と末社の神の疊をたたいて語りしは尤也。

この評言は、「末社の神の疊をたたいて語りし」とあるので、あるいは百沢寺―岩木山神社の末社の禰宜によるものであろうか、「正直第一之神達」が我欲で「国」を争うはずはなく、山海を乱し、領民に苦難をかける筈はないという。とくに「岩木山大権現」はそのような無法の神ではないともいう。これをうけて、「権現平雨」の記述を「虚言」としている。「岩木山大権現」が唯一の存在としている訳ではないが、もつとも敬されるべき存在として、津軽の地に豊饒をもたらす神として意識され、他に優越する地位を確立していったのである。

このような岩木山（「岩木山大権現」）に対する認識は、弘前藩が強調し、主導するものでもあった。享保一六年（一七三一）に成立した官選史書『津軽一統志』²⁴首巻でも、陸奥国、津軽郡と触れ、次いで岩木山を挙げる。そこでは、「（前略）此山者帷貴為当国之鎮守、採而拏邦郡事之一而巳」（此の山は帷^ひり当国の鎮守為ることを貫つとんで、採りて邦郡の一に挙げるのみ）とされている。さらに、『倭漢三才図会』を引き、「岩

木山大権現」は、厨子王が安寿を祀った社（「故而安寿霊、津志王祭是於神」、故ありて安寿の霊を津志王是を神に祭る²⁵）であり、そのために「丹後人」は登山できない。諸国を往来し交易するのが世の常だが、この山の謂われがあるため、「丹後国」人は津軽領に入ることも住むこともできない。また、急に海が荒れると「村老漁叟」は「郷之古制」²⁶にしたがって繫留された船を調べる。必ず「丹後人」がおり、岩木山の由来を説き人と船を去らせると、たちまち晴天となるという「丹後日和」が記される²⁷。

この『津軽一統志』の岩木山をめぐる二つの記述は、次のように読み取れよう。前者は津軽の地という空間には「丹後国」人は入ることも住むことも許されないという神威であり、後者はその神威を冒すものがあればたちまち神譴を蒙るという俗信（「郷之古制」）をもととした、生活と生産＝日常の平和を乱すものを自力で排除しようとする共同体（村）の論理の問題である²⁸と。

しかしながら、「国日記」に記録された一八世紀後半近くには事情が異なってくる。「国日記」延享元年（一七四四）三月二三日条の「三奉行申立」は「此間風二而苗なと枯候由」という「風説」をもとに高の湯治の停止を家老棟方作右衛門へ上申する。これに関わり、「国日記」延享元年（一七四四）四月二日条の「郡奉行申立」では次のように記している²⁹。

一、郡奉行申立候、打続天氣相悪敷御座候付、嵩江之湯治人坏も御停止被仰付候、尤前々丹後者御国江参候得は天氣悪敷段、下々唱候儀も御座候間、若丹後者参居候ハ、早々相返候様、寺社奉行并

当町浦々江も被仰付候様奉伺旨申出之、作右衛門江達之、左之通申付之、

此間打続天氣相悪敷、嵩之湯治人抔差留置候、若丹後者御国江参居候哉、詮儀之上弥参居候ハ、早々相返り候様、各支配江可被申付候、

右之通廻状にて九ヶ町奉行江遣之、寺社奉行・町奉行江は連名之手紙にて申付之、尤当町奉行江は太夫兵七役者之内丹後者参候儀も有之間、前々之通申付之、早々相返り候様ニと申遣之、

ここでは、「打続天氣相悪敷」という状況に、まず嵩での湯治が停止されている。それだけではなく、領内に「丹後者」が入り込んだための天候不順ではないかという「前々」からの「下々唱」を根拠に、その送り返しを藩が執行しようとしているのである。一八世紀前半末には、以前の（「前々」）からの俗信（「郷之古制」は「下々唱」に替わり、また「丹後者」の追い返しは「村老漁叟」ではなく、藩が行うものになっている）ことに注目する必要があるだろう。また、その対象は湊に繋留された船（「丹後船」・船頭・水主だけでなく、町方では「太夫兵七役者」が主たる探索の対象となっている。歌舞伎集団は、「丹後者」が入り込む可能性が最も大きい人的集団として認識されているのである。³⁰）両者に共通するのは、藩境を越えて移動する人間の存在ということである。

岩木山（岩木山大権現）の神威・神譴にふれることに天候不順の原因を求めることは同じでも、一八世紀前半には主に嵩・湯段への「不浄者」の入り込みが問題とされたのに対して、後半にはさらに「丹後者」の領内入り込みが原因として加わる。言葉を換えれば、藩はそれに主体的に

関わることで神威に繋がり、不作を回避させ得る権威を保持するものとしての自らを演出したことになる。無論、そうした理由や論理は後付けのものであって、実際には天候不順によって不作を危惧する「天氣悪敷諸人之唱」が囁かれると、そうした社会不安の除去を図るために、天候不順の原因を神域の自然秩序を冒すもの、あるいは行為（「不浄之者」）に帰したのである。

一八世紀前半、嵩・湯段で繰り返された入湯差し留めに対して、湯治Ⅱ疾病の温泉療養―医療行為を求める領民の欲求と、それに突き上げられての百沢寺―小屋主たちによる差し留めの撤回を求める訴願の繰り返しが確認される。そして、藩領を越える人の移動が拡大する一八世紀後期から一九世紀には、天候不順に関わる俗信は一八世紀前半に生まれた「丹後者」の排除を基軸とするものへと変容する。新たな他者の排除の論理の形成と定着、その過程とそれが生む軋轢と抵抗が、次に検討すべき課題として浮上してくる。

註

（1）「国日記」宝暦四年（七五四）五月二八日付「覚」では、「依之公辺御武運長久は勿論、春秋旱雨之過・不温冷湿・虫之損害無之事を上御常住方寸之間も御祈念良久、此為二五山及諸社被成安置、貴僧を請し、高僧を被置、御分限之高祿御寄附有之」ものとして位置づける。

（2）百沢寺は、真言宗智積院に属し、岩木山（慈恩山）光明院と称した。岩木山三所大権現（現岩木山神社）の別当寺であったが、明治四年（一八七二）廃寺となった。由緒では、延暦十五年（七九六）、坂上田村麻呂を開基とし、施暁を開山として岩木山の北麓に創立。寛治五年（一〇

九一)、神託によって南麓へ移り百沢寺と称した。天正一七年(一五八九)、岩木山の噴火で焼失し、津軽為信が慶長一六年(一六一一)に再建した。

二代藩主信枚は寺社領四〇〇石を与えた。

(3) 浪川「豊饒をめぐる祈念と営為」(浪川健治・小島康敬編『近世日本の言説と「知」』、清文堂、二〇一三、所収)。

(4) 「天気不正」は天候不順であるが、「天気不勝」とも記されたので、「ふしょう」と読まれる。

(5) こうした視点で、本稿に大きく関わる先行研究として、黒滝十二郎「津軽嶺嶽温泉と岩木山信仰」(『弘前大学國史研究』第九八号、弘前大学國史研究会、一九九五)、長谷川成一「近世津軽領の『天気不正』風説に關する試論」(『弘前大学大学院地域社会研究科年報』第五号、二〇〇八)、同「北の世界遺産白神山地の歴史学的研究」(清文堂、二〇一四)に「天気不正」風説と白神山地」と改題して再録。また、民俗学や地理学の分野からも多くの研究が蓄積されている。長谷川論文については、金子直樹「岩木山信仰の伝播について」(『E-Journal GEO』2016 vol.11(1)、日本地理学会、二〇一六)でも引かれる。なお、金子論文は民俗学や地理学の主要文献を挙げる。

(6) 「弘前藩庁日記」は、国許における政務全般を記した「御国日記」(『国日記』)と、江戸屋敷の記録である「江戸日記」がある。前者は寛文元年(一六六一)から元治元年(一八六四)までが残される。後者は寛文八年から慶応四年(一八六八)までが残される。

(7) 嵩温泉は岩木山の南西麓にあり、現在の所在地は標高四五〇メートルに位置するが、泉源は南腹、湯ノ沢の沢頭の標高約七〇〇―八〇〇メートルの地点にある。寛政以前は、岩木山の湯の沢周辺に所在していたとされる。

(8) 湯段温泉は岩木山の南西麓標高四〇〇メートルに位置し、北東一・五

キロメートルに嵩温泉がある。

(9) 小栗山十二社権現八幡は、弘前市の南郊外、大鰐山地北麓に位置する。明治初年の『新撰陸奥国誌』第2巻(みちのく叢書12巻、青森県文化財保護協会、一九八三)では、もとは、一ノ渡村の東南にある八幡岳に鎮座していたが、寛永八年(一六三二)に小栗山村に遷座した。「今も早魃の時は近郷の者とも神体を八幡岳に昇き登て零るに必驗ありと云ふ」(『零』は、あまこい)とされる。

(10) 『津軽俗説選』(『新編 青森縣叢書』、歴史図書社、一九七四)、天明六年(一七八六)に工藤白龍(常政、屋号にちなみ練屋藤兵衛とも)が一八世紀後半に流布していた伝承をまとめる。

(11) 湯治は温泉地に長期間滞留して特定の疾病の温泉療養を行う医療行為であり、娯楽・保養としての旅行とは異なる。

(12) 「国日記」宝暦三年(一七五三)四月一日条の二月一七日から三月二六日までの酢ヶ湯^⑧への入湯者と同温泉におかれた湯小屋数は次の通り。

一、横内組代官申立候、

一、男女八百貳拾壱人

内

三人

津軽百助家来

五人 御領分出家

三人

郷侍・青森町同心

三人

御領分座頭

六百四拾八人 御領分男

七拾壱人

右同女

貳拾九人

黒石御領男

五拾七人

黒石御領女

一、小屋六拾九軒

内

貳軒御番所小屋

六拾七軒売買小屋

盛岡藩領からも入湯者があったことが、「国日記」明和八年(一七七二)

三月八日条からも知られる。同年二月五日から三月三日までの入湯者については、次の通りである。

一、浦町組代官申立候、

一、男女四百拾五人

内

御領男 貳百九拾六人

御領女 貳拾九人

黒石領 男拾三人

南部領 男七拾人

同所 女拾五人

一、小屋六拾三軒

内

式軒ハ 役人居小屋

六拾壹軒 商売小屋

(13) 事例は極めて少ないが、「国日記」寛政八年（一七九六）三月一日条では酢ヶ湯での入湯が「天気不正之旨相聞得候」とされ湯治人差し留めとなっている。理由として、①「先頃より青森近在并所々在方より湯治人多入込」み、さらに②「其上女杯も罷越候ニ付」が挙げられる。女性も含む大勢の入湯者を理由とすることから、三月という時期を考えれば、「天気不正」を理由に農事専念を図ったと考えられる。

(14) 「硫黄の平」は、火山活動に地表に硫黄が露出した場所で、現在の嶽温泉地から岩木山頂へ向かう途中の山腹辺りに位置したと思われる。

(15) 長谷川前掲論文でも、この点については「百沢寺には入湯者の規制を命じた」とのみになっている。著書二七一ページ。

(16) 近世前期、弘前藩は領主経済の動脈として、青森と鰺ヶ沢を要とする湊の地位を確定し、領内諸湊の機能の分化を明確化した。米の主積出港

としての青森・鰺ヶ沢を「両浜」として頂点に置き、その他の諸湊に中継港、避難港、造船、木材移出という流通統制上の機能を分掌させ、加えて陸上番所を組み込んだ交通・流通の領国的編成体制の成立であった。この編成された湊と番所による流通統制体制を九浦制度と呼ぶ。

(17) 「御封印」は、湯元と湯坪の二つを勤番が封印すること。また、長兵衛については、「国日記」元文二年（一七三七）四月二十九日条の「駒越組代官申立」では、同組の「枯木平村之者共并賀田村長兵衛」が、枯木平村にある「湯段之湯」で「新田開発願」を「絵図」とともに提出し許可されている。同一の人物ならば、賀田村に居を構えていたことになる。

(18) 享保期の青森湊では船持層が「難儀」に陥っている（浪川「享保期の藩政と民衆動向」、沼田哲編『東北』の成立と展開、岩田書院、二〇〇二、所収）。また、廻船問屋は瀧屋宇兵衛以外にも伊勢屋十左衛門・市郎左衛門（市郎左衛門は別名落合千左衛門。天明三年（一七八三）青森町騒動の頭取）も久栗坂山や「蓼月山」を請け負っている（浪川「落合千左衛門と伊勢屋」『弘前大学國史研究』第一四九号、二〇二〇）。

(19) 黒滝前掲論文では、文化六年（一八〇九）の「岩木嶽諸役銭上納帳」（個人蔵）を引いて、「惣小屋主」は「両湯坪」の役銭二八〇目（春一四〇目・秋一四〇目）、「貸小屋」四坪の役銭二文目（春一文目・秋一文目）を百沢寺に上納していたことが知られる（三二二ページ）。したがって、「湯治」の停止は「小屋主」に大きな経済的損失を与える。

(20) 「種蒔苗代」は、嶽の神が種を蒔いた所だと伝え、参詣者は種蒔苗代で農事の豊凶を占い、山頂に達して奥宮に御幣・御神酒などを奉納し、御来光を拝する。

(21) 長谷川成一前掲論文、二八一ページ。元禄八年の飢饉については、浪川「津軽藩政の展開と飢饉」（『歴史』五二輯、東北史学会、一九七九）参照。

(22) 岩木山は円錐形の成層火山。山頂は三つの峰にわかれ、北東に向け鳥海山、岩木山、巖鬼山とならぶ。

(23) 寛延二年は春中は雨がちで土用頃には冷気が入り、七月末頃の出穂期に西南あるいは西風をうけたため稲は結実しなかった。結局、平年の「三・四分作」で、七月・八月には米価は一俵(四斗)三五・六匁(通常は六文遣とされる銀一匁〓六〇文という領内での換算を行ったもので銭三五・六匁は二貫一〇〇文〓二貫一六〇文)となり、前年の一・七五〓一・八倍に上昇した。この結果、餓死者や捨て子が多く出て、飢えに瀕した者が農村から城下弘前へと流入した。浪川「18世紀におけるリスクとしての飢饉」(河西英通・浪川健治編『グローバル化のなかの日本史像』、岩田書院、二〇一三)。

(24) 津軽家氏祖先信〓四代藩主信政までの弘前藩の官撰史書。享保一六年成立。弘前市立弘前図書館八木橋文庫。

(25) ただし、祀られる神については、安寿以外にも諸説が伝えられる。

(26) 「村老漁叟」、老と叟は同義。村の長老、オトナを意味する。

(27) 「丹後日和」については、長谷川前掲論文では、成立を一八世紀前半とし、「国日記」元文五年(一七四〇)七月一二日条の「宮崎忠兵衛申立」が初見としている。ただし、日付は同年八月一日条である。これより早く「国日記」元文五年七月一五日条の「鰺ヶ沢町奉行・斎藤市右衛門申立」に「今六日御廻船并売船ニ丹後者罷有候由相聞へ候、夫故不勝之天氣相ニも有之か、田畑并船共之為ニも不罷成候間、急度可申旨」という記述がある。重要なのは氏の指摘のように、なぜこの時期に藩が領内から排除すべき対象として「丹後者」を指定したのかである。同書二七九〓二八〇ページ。この点、とくに豊穰祈念と除災という視点から、浪川(3) および「天氣不勝」と自然の回復」(『弘前大学國史研究』第一四六号、二〇一九)。

(28) 前述の「国日記」寛文四年(一六六四)閏五月一四日条の「雨祭」の執行を求めた「在々肝煎共」の動向は、自力での排除から藩による俗信の包摂が行われる過程の状況とも考えられよう。

(29) 「国日記」の「丹後者」の追ひ払いの初見は(27)のように元文五年であり、わずかに四年後の記述である。追ひ払いは、本質的に入り込んだ他領者へと対象が拡大されていくものであったことを意味しよう。

(30) 「国日記」寛保三年(一七四三)六月二六日条には、町奉行小野三右衛門の「申立」が記される。

一、小野三右衛門申立候、太夫兵七方江此間參候役者之内、丹後者參候様被及御聞候二付、僉儀之上相返候様可申付旨被仰付候、名主山科仁右衛門江僉儀申付候処、丹後者老人も無御座候由、名主仁右衛門并兵七方より差出候別紙書付共二指上候旨申出之、八兵衛江達之、
「丹後者」が領内に入り込む可能性が強い職として「役者」(歌舞伎)が想定されている。歌舞伎集団が興行を成功させるためには新たな企画や趣向が必要であり、他領からの役者の流入を必須としたためであろう。
(31) 一八世紀後半にかけては、温泉の利用のあり方は疾病の温泉療養行為としての湯治から、休息あるいは娯楽としての入湯へと変化していく。このことは藩と百沢寺・湯小屋主、利用者をめぐる新たな緊張関係を作り出す。それについては、**まとめにかえて**で挙げた課題に関わらせて別稿で検討したい。

(なみかわ・けんじ 筑波大学名誉教授)